

主体的遊びによる環境への関わりについて

～応答的・対話的遊びをとおして～

初等教育科 石川 千穂子

【要旨】

主体的なモノや人との関わりによる遊びについて応答的対話的関わりによる視点から事例研究を行い主体的遊びと環境への関わりについて考察した。

事例研究より、幼児はモノや人などの環境に関わりながら遊びを進めていく。モノや人、事に対し興味をもつ。そして、興味から気づきが芽生え環境への関わりが生まれる。興味や気づきにより遊びへの持続性・継続的意識が湧き試行錯誤や疑問解決追及による遊びへと遊び方に変化が生じ応答的遊びや対話的遊びになり主体的遊びへつながっていく。それは身近な環境、自然、物的、人的等様々な環境に関わりながら主体的に遊びを進めていくことであり、協力・自己判断決定力等の力が助長され更なる遊びの展開、学びに向かう力が生まれていく。

【キーワード】

応答的 対話的 身近な環境

1. はじめに

幼稚園教育要領¹⁾、保育所保育指針²⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾は平成29年3月同時改訂され改訂ポイントに、幼稚園教育において育みたい資質・能力について幼児期の特性を踏まえて「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」という3つの柱として明確化された。更にこれらは個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、一体的に育てていくことが重要とされ、現行幼稚園教育要領の5領域の枠組みにおいて育むことができると記されている。領域「環境」では、幼稚園教育要領第2章ねらい及び内容において、周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活

に取り入れていこうとする力を養うと定められ、内容として(1)自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(2)生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。(3)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。(4)自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。(5)身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり大切にしたりする。(6)日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。(7)身近なものを大切にする。(8)身近なものや遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。(9)日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。(10)

日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。(12) 幼稚園生活内外の行事において国旗に親しむと記されている。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい「思考力の芽生え」は、主として「環境」の領域に関わり具体的な姿として「身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。又友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをより良いものにするようになる。」と示されている。本山方子氏は10の姿+5実践解説書の中でこの「思考力」について乳幼児期に芽生える思考力とは、より直接的な関わりを通して、物、事、人などを相互に関係付ける力であり、関係の付け方を工夫する力を意味する⁴⁾とある。まさに「学びに向かう力・人間性」の土台となる基礎力であり重要性をもっている。遊びの姿からいえば主体的にモノや人との関わりが見られる遊びや積極的に興味をもって関わって遊んだり好奇心探求心をもって関わって遊んだりしている姿が浮かんでくる。これらの意欲的関わりの遊び主体的遊びは、初期遊びではどのような形態で遊びが始まりその遊びが進んでいくのか、環境への関わりについてモノや人に応答的対話的関わりの時に変化が表れ、そこから学びの姿思考力そして学びの力へと移行していくのではないかと仮説を立て、事例研究を進めていくことを目的とした。

2. 研究の目的

本研究では、過去の実践事例から主体的遊びと環境との関わりについて、応答的対話的関わりが生じ、環境に自ら関わっていきこうと行動し

たときに遊びの変化が生じ（主体的遊びへ）、更に、思考力の芽生えに向かう学びの芽生えに繋がって行くと考え、応答的関わりや対話的関わりが主体的遊びを通し環境に働きかける元になるのではないかという応答的、対話的視点から事例を分析し、主体的遊びと環境との関わりについて考察していくことを目的とする。

3. 研究方法

(1) 過去の実践事例についてエピソード形式で記述し事例研究を行う。

(2) 事例について主体的遊びに変化した要因について応答的・対話的遊びに視点をもち事例ごとに省察する。

(3) 主体的遊びと環境との関わりについて考察を行なう。

4. 実践事例

【事例1】「浮いた！」

4歳児たんぼぼ組（平成28年6月21日）

4歳児J男は登園後すぐに園庭にいる保育者のもとに手にトレイをもって「おはよう、これを船にするんだ！」と目を輝かせながらやってくる。園庭には昨日からの雨で長さ5メートルぐらいの大きな水たまりが出来ている。すぐに水たまりにトレイを浮かべ始める。「浮いた！」とすぐ傍で遊んでいるK男に喜びを伝える。K男は、ちらっと見るが何も言わず自分の遊びを続ける。担任が「ほんと浮いたね！トレイって水に強いんだね」と言い、船のイメージが持てないからK男は興味を示さなかったのだろうと思ったのか「いいアイデアがあるよ。船に旗を付けない」というと、J男は「いいね。」と喜び保育室で船の帆作りを始めた。「青色の船にするんだ。」と青色のクレパスで色付けを始めた。その姿を見つけ外で遊んでいたK男もやってきて水色のクレパスでトレイを用具置き場から取り出し色塗を始めた。旗に色を塗り終え竹

ひごをトレイの中心部分に刺し船は完成した。早速二人はすぐに園庭の「みずたまり」に船を浮かべた。「うわ！本物の船みたいや。」とJ男は言うが、「動かんやー。」とK男に向かって話す。「風がないけん動かんのやー。」と眩くJ男二人は口で息を吹き掛ける「あんまり動かん。」とK男がいった時担任が「ストローとかで吹くのどう？」というとすぐにストローで試すJ男とK男であった。ストローから出る息の風で船が動き出し「動いた。」と2人は喜んだ。3歳児保育室前にあるテント下からジャングルジム前まで続く長い「みずたまり」約5メートルほどを海に見立てスタート地点をもも組前あたりと決めて二人は競争を始めた。「よーいスタート！」息を吹き船を動かして遊んだ。ジャングルジム近くまで行くと「ゴール！」と笑い次にK男が「じゃあ次、今度はあっちがゴール。」といってまた息を吹きながら動かしていく。最初は船の遠くから息を吹いていたが、船の近くで息を吹いた方が早く進むことに気付き身を最小限にかがめて吹いた。翌日も遊べるようにと担任はたらいを準備しておく、J男は前日作成した船の先を尖らせ改良した船を浮かべて「よし、これの方が速く動くぞ。」と嬉しそう。そしてK男は、そのJ男の船を見てすぐにストローを取り出し息を吹きかける。その様子をB子が見ていてうちわを持ち出し船の上から仰いだ。

勢いよく仰いだので船は大揺れひっくりかえりそうになった「B子優しくして、こっちからして。」とJ男はB子に伝えK男はストローJ男は水鉄砲B子のうちわと3者3用で仰いだり吹きかけたりして船を進ませて遊びは続いた。(平成28年7月25日別府大学附属幼稚園園内研修資料より)



写真1 みずたまりに船を浮かべるJ男とK男

～著者による省察～ 事例1

・偶然できた「みずたまり」という自然環境に興味を示しトレイの船を浮かべたり船らしく作り変えたりしてK男と一緒に遊びを広げ、自然環境の場を浮かべ遊びの海という応答遊びの場にして楽しむJ男の姿が見られる。

・J男は、登園してすぐに目に入った園庭に出来ていた長さ5メートルくらいの「みずたまり」の環境に気づき、今までの遊びで経験のある船を浮かべるとい遊びを考え行った。これは、「みずたまり」という自然環境にJ男が興味を持ちそこで遊べる、浮かべ遊びをしたいという自らの応答的遊び、応答的環境になり「みずたまり」を主体的環境にして関わり遊んだといえる。

・最初は興味を示さなかったが、次第に一緒に遊びに参加し遊び方を工夫していったK男の存在。K男が遊びに加わったことで、ストローから息を吹きかけて船を進ませたりスタートとゴールを決め浮かべ遊びを船の競争遊びへとさらに面白くして遊ぶ主体的遊びに変化させていったといえる。

・J男は、「船らしくしよう」と浮かべていた「トレイの船」をクレパスで色を塗ったり家で船の先を尖らせたりと工夫・改良し主体的な浮かべ遊びへと発展させていった。

・担任がJ男の考えに共感し「旗」や「ストロー」などのアイデアを出し遊びを支えたことが遊びが主体的になっていった要因の一つと考えられる。

・遊びが続いた理由は、翌日には園庭に「みずたまり」はなくなっていたが「たらいを準備する」という援助が、J男の興味を消すことなく浮かべ遊び船を競争させる継続的遊びへつながったと考えられる。

・友達と一緒に楽しんだり工夫しようとしたりしたJ男の心を支えたものとして、

- ①友達を刺激し合える仲良しのK男の存在。
- ②園庭に出来た大きな「みずたまり」という環境。
- ③「船」のイメージが湧くようなアイデアを出し、ストローや旗等モノを提案した教師の存在。
- ④翌日も遊べる用意された緑色のたらい。という4つ環境が考えられる。そして、いろいろなものを使って遊べるいつでも作れるものや場所への環境構成があり友達と一緒に遊びを広げて主体的に楽しむJ男の姿といえる。

【事例2】「最後の一発！」

3歳児もも組（平成28年6月13日）

水の心地よさや感触を楽しんだり落ち着いて遊んだりできるように考え、もも組前テラスにテントを張り、水遊びの場を用意している。U哉はいつものようにその場へやってきた。500mlペットボトルを手に取り、水道の蛇口にボトルの口を差し込み、水を入れる。ボトルからあふれ出て噴き上げる水の動きに見入っている。15cm程吹き上がる水に「がんばれ！」と言いながら手を上下に振る。ボトルから水があふれている様子を見た担任が「溢れているよ。いっぱいになった？」「持っていくの？」と聞くとU哉は「うん。」と答え水遊びの場へいっぱいに入ったペットボトルを持って行った。遊びの場には空の観察ケースの水槽がある。ボトルの水をその水槽に入れる。入れ終わると走って水道へいき、またボトルをいっぱいにして水槽へ入れる。何度か繰り返しU哉は「増えた。」という様子を見ていた担任は、「増えたなー。」

と水嵩が増えたことを意識できるように指で知らせている。U哉も担任に伝えるように「こんくらい。」と水の溜まっている所を指で差した。水がたまった水槽の中に横向きにペットボトルを鎮めると泡が出てきた。泡を見て指差しU哉は笑う。しかしペットボトルの中には先ほどの水道の場所とは違い水はうまく入らない。U哉はうろうろしながら自分の前でA夫が使っている大きな水槽を見た。A夫に近づき「A夫君かして。」と声をかける。聞こえていないのかA夫は反応せずに大きい水槽で遊び続ける。U哉はそのまま自分の場所に戻った。担任はU哉が満足するようにと2ℓ入り2本のペットボトルに水を入れ、「1本、2本どうしようかな？」とU哉に差し出しながらどのくらい水を入れるかを聞く。「2ほん！」と答える。担任は2本の大きいペットボトルを一気に水槽に入れた。水は水槽から少し溢れ出た。その溢れ出る水を見てU哉は声をあげて笑う。その後いっぱいになった水槽を見て、「一回流す。」と水槽をひっくり返した。空になった水槽を戻しペットボトルを持ち水道へ行った。次は溢れないようにボトルがいっぱいになると手の平をボトルの口に蓋代わりにして押さえゆっくりと水槽まで持っていく。次はボトルを早く持っていけるように手では押さえず走って水槽へ持っていく。水槽が溢れそうになると確かめるように水の表面を手の平で撫でた。撫でると少しずつあふれ出ていく水に気づき、バシャバシャと水を手でかき混ぜた。「最後の一発！」といいながら少し嵩の減った水槽中に勢いよく水を入れていく。水槽はいっぱいになった。ボトルいっぱいにはこぼさずに入れることができるようになって走って運ぶ。11回目を入れる時に「いっぱいになるかな？」とU哉に尋ねると「まだだ。」と水槽の水嵩を見ながら確かめまた水を入れに行く。いっぱいになるとひっくり返し、水の流れていく様子をじっと見ているU哉であった。（別府

大学附属幼稚園平成28年7月26日園内研修資料より抜粋)

～著者による省察～ 事例2

・3歳児のU哉が「水」に興味を示しじっくりと遊んでいく様子である。

“水”という当たり前の身近な自然環境に、ペットボトルという身近にある素材の物的環境“もの”を使って水を入れたり出したりしながら遊ぶうちに水を入れるペットボトルや水槽に対し、対話的関わりをしながら遊ぶと楽しくなるだけではなく、水の嵩が増えたり減ったりしていくことに気付き、さらに興味が湧き主体的な水遊びへと遊びが変化していった姿・様子が見られる。

・水に対してのU哉の興味について。

- ①ペットボトルを水道の蛇口に差し込み、噴き上げる水の出方を見る。
- ②水槽の中に沈めたペットボトルから出てくる泡を見て指さして笑う。
- ③水槽の水がいっぱいになったことを手の平で撫でて確認をする。
- ④いっぱいになった水槽を勢いよくひっくり返し、出ていく水の流れ方を見る。
- ⑤ペットボトルを横向きにしても水が入る大きな水槽を探し、目の前で使っているA夫に声をかける。という5つの気付きがある。

・3歳児の6月という入園間もない時期ではあるが一人で遊び楽しめている理由について。

- ①いつも遊んでいる自分の保育室の前に水遊びの場という環境が用意されていた。
- ②担任が近くにいて時々遊びに入り「どうしようかな？」など声をかけてくれる安心できる環境になっていた。
- ③中が見える透明の水槽やペットボトル、平たいカップなど日頃から触れているもので遊べるように用意された道具があった。
- ④水嵩が増えることを意識させ一緒に水槽の水

をいっぱいにして遊んだ担任の人的環境と援助。

⑤予想出来ない水や泡の動きがあったこと。の5つが考えられる。

・じっくりと気の向くままに「水」という身近な環境に関わり「水」に対する気付きが増して興味が高まりその遊びを存分に保障してくれる時間的環境と空間があることも、U哉の単なる水遊びが「え！なんで？」と思い水の入れ方や運び方、水槽に移していくと水の水位・嵩の変化がある気付きなど主体的な水遊びへと変化していった要因といえる。

【事例3】「ごはんできました！」

3歳児うめ組（平成28年6月21日）

6月上旬ごろより保育室前のテラスに水遊び用の机を出し水槽、カップ、ペットボトル、スプーンなどを用意して自分たちで遊べるようにしている。B子はいつものように背の低い水槽からゼリー型やカップ、小ペットボトルに水を移して遊び始めた。そこへH也がやってきて、水槽の中に大量のボトルのキャップを入れてそれをかき混ぜたりすくったりして遊び始めた。横で水を移しながら遊んでいたB子もすぐに真似て背の低い水槽へ手でキャップをすくい入れ混ぜ始めた。いつもは水を入れたカップの中にキャップを1～2個入れて遊ぶB子だったので水槽の中に直接手を入れて遊ぶH也に驚いた様子でH也の顔を見る。そこへH花が来て、プリンカップにスプーンを使って水を入れ、黄色のキャップを入れて「プリンで～す。食べてください。」と傍に来た担任に渡した。「美味しいな。」といいながら食べる真似をする私（筆者）をみてB花は持っていたカップにさまざまな色のキャップを入れ「スープです。どうぞ！」といい机の上に並べた。「食べるスプーンが欲しいなあ。」とB花にいうと、水遊びの道具の中から白いプラスチックの小さなスプーンを取り出

して私に渡してきた。食べる真似をする私を見て、にこっと笑った。その後ヤクルト容器に小ペットボトルから水をいっぱいに入れ赤いキャップを蓋で絞めて、「これはりんごジュースです。」と渡す。その後も緑色のキャップを集め水の入った水槽へカップを浮かべ「これはメロンです。」と傍にいる私やH花、S子に渡す。近くにT男が声に誘われてやってくるとB子は、「ここいいよ。」と自分の今まで立っていた机の場所を譲りB子は横部分に移動し一緒に遊ぶことを誘い、カップやスプーンなどを見せた。「これかして。」というT男にスプーンを渡し「これでジュース作りよったんや。」と説明する。どこからともなくやってきたS子が「S子もそれしたい。」というとすぐに反応したB子は「S子ちゃんいいよ。」とカップ、スプーンをS子にキャップとともに渡す。同じスプーンとカップを探しS子の隣へ行き、再びジュース、スープ、お茶などを作り始めた。S子が水槽の中に入っている魚型タレビンを集めカップに入れて「お魚がつかれました！」とB子へ見せる。B子は魚型タレビンだけを集めヨーグルト容器の大きいカップに入れかき混ぜ「お魚を焼いています。」と答えた。そして、魚だけを出して何も入っていないカップへ移し、スープのカップ、ジュース、魚と並べ保育室にいる担任に「ご飯ができました。食べてー。」と見せに行く。「うーんおいしいね。」と食べる真似をする担任の言葉に笑顔になりS子と顔を見合わせ再びスープやジュースを作るB子である。(別府大学附属幼稚園平成28年7月27日園内研修資料より)



写真2 スープ作りをするB子

～著者による省察～ 事例3

・同じクラスの友達(人的環境)に関わりH花やS子の遊ぶ様子、担任の存在を感じながら友達と同じ遊びから自分の考えを出して遊び、教師や友達との中で楽しく遊んでいくB子の主体的な遊びの姿が見られる。

・人的環境である教師や友達と対話的な関わりを楽しんでいる姿と捉えられる所は、

①教師に「これはりんごジュースです。」「これはメロンジュースです。」といい飲んでもらったり食べてもらったりしながら遊ぶ姿。

②H花が「プリンです食べてください。」といい担任に渡す姿や近くにやってきたT男の存在に一早く気づき「ここいいよ。」と席を譲ったりしながら一緒に遊びを進めていこうとするB子の行動。

③S子の「S子もしたい。」という声に反応し「S子ちゃんいいよ。」とキャップやスプーンを渡し一緒に遊びに誘ったりS子が使っていた魚型タレビンを集めて「お魚焼いています」とアイデアを出したりして自分の考えた遊びにして遊ぶ。という3つが考えられる。

・主体的遊びに変化していったと思われる「見立て遊び」をB子が存分に楽しめた理由について。

①保育室前のテラスに保障された水遊びの空間がいつも用意されており、安心して遊べる水遊びの環境構成の場があった。

②数人の友達が集まれる広さの机という物的環境が準備されていた。

③水遊びをするために用意された水槽、カップ、小ペットボトル、大小のスプーン、いろいろな色のボトルのキャップ、魚型タレビンなどの身近な容器や扱いやすい道具があった。

④H花がキャップを浮かべて「プリンです。」という食べ物にして遊ぶというアイデア。

⑤B子が遊びながら発する声に気づき関わりをもって食べたり話しをしたりと対話を介して遊

んでくれる教師の存在。の5つが考えられる。
・事例の中でT男やH花は、水遊びという環境の場や素材のキャップの色、カップという“モノに応答的遊びをしている”のに対し、B子とS子は「S子もそれしたい。」という声に合わせ「いいよS子ちゃん。」と言葉を返し「お魚連れました。」といいながら遊び、B子はS子の使っていた魚型タレピンを「お魚を焼いています。」と答えて楽しむという“対話的遊びを行っている”ことが分かる。これらのことからB子やT男達3歳児は、応答的遊びや対話的遊びをしながら自分から環境に働きかけていくことが主体的遊びになっていくことが伺える。

【事例4】「どうしたらまっすぐに行くん？」

5歳児ふじ、あじさい組(令和元年11月8日)

幼稚園の裏にある雑木林、(子どもたちは幼稚園の森と呼んでいるこれから以後森と記す)で少し高い場所になっている傾斜面にベニヤ板2枚を持っていき今年の5歳児が遊んでいたコンテナの中に人が入り坂を滑る遊び”ジェットコースター遊び”を始めた。コロが下面に付いたコンテナ1台と囲みのない板のみ持ち手の付いた台1台との2種類の乗り物を使い遊ぶ。コンテナ台車は二人乗り、板台車は一人乗り、と称し滑り始める。何度も滑るが、ベニヤ板の上で微妙に曲がってしまい2枚の板坂道を下までうまく滑り降りられない。「なんで？曲がるなあ。」C介はつぶやき再度坂道の上に台車を持って行き滑る。横にいるE男や、Y子、A子、M子、Z美5人もみんな曲がりながらベニヤ坂道の下まで滑り、まっすぐに滑り降りられる者は誰もいない。Z美が「みんな！板が悪いんじゃない。」といい、板の継ぎ目の所を見に行く。C介が「そうやな、ここ切れちょんけん曲がるんかも。」といい、布テープでベニヤ板のつなぎ部分を止める。「いいよ、すべって。」合図を出し、上から一人乗りでE男が乗り滑り降りる。



写真3 ジェットコースター遊び

途中で曲がってしまう。「だめやなあ。」Y子が「私ここ持っとくわ。」といい、コンテナから出ている紐をしっかりと持ち、「これで乗ってみて。」とアイデアを出す。一人乗りに乗っていたE男が今度は二人乗りで乗り換えて挑戦する。ベニヤ板の下でC介が待ち構える。「いいよ、すべって！」声をかけるC介。見守られながら滑り降りるE男。「わー！」叫びながら滑る。しかしやはり途中で曲がり倒れ込んだ。その時D子が



写真4 まっすぐに滑るDちゃん

「なにしよんの？」と森のジェットコースター坂道の場所へやってくる。D子は、誰も乗っていない一人乗りですっとしゃがみ両足を板の横に大きくひろげ「わー！」といいながら滑り降りた。板道下まできれいにまっすぐに滑り降りた。C介が、「Dちゃんまっすぐ行くんや。なんで？」「どうしたらまっすぐ行くんかな？」Y子も「ほんとや、Dちゃんすごいで、まっすぐやなあ、もう一回行ってみて。」友達に言われるままにD子は、3回も一人乗りで滑り降りた。C介「分かった、スーって体まっすぐにして乗りよんわあDちゃん。」下において上にいるY子に向かって話す。Y子は、「でもそれ変わらんよ？運転がうまいんやDちゃんは。」C介

が坂道上まで来て一人乗りに乗り滑り降りる。曲がった。Y子「ほらな、Dちゃん運転がうまいんや。」そういわれてC介は、さっき止めた板の継ぎ目部分がずれていたことに気づき「いや、板が悪い、今度俺がすべる時、E男こっしかり押さえて持ってて。」と下に居るE男に頼む。「いいよ。」E男は、ベニヤ版の継ぎ目部分の端を両足両手で押さえる。二人乗りに乗り換えD子が乗って滑り降りる。うまくいった。C介「分かった、今Yちゃん紐持った時、二人乗りまっすぐにしたやろ。だけんやない？」Y子「そうや、道に（板部分）二人乗りまっすぐにして乗れば？いいかも。」「ここ持っとくよ、C介乗ってみて。」二人乗りの台車を持つ。「道にまっすぐかあ・・・」C介が呟く。板中央を押さえていたE男も上に来てY子と一緒に後ろで紐を引き、二人乗り台車をベニヤ板に対してC介がまっすぐにして乗り込み滑った。見事下まで曲がらずに滑り降りた。「すべった！」と喜ぶ。その後入れ代わり滑り遊んだ。一人が紐を引っ張って持ち、横に居る一人が車台を板に沿って真っすぐにし乗り込む、乗り込んだ人が「はい、いいよ。」というまでは手を放さない。「せーのー、1、2、3」と掛け声をかけ紐を持っている手を放す。という方法を見つけ出し5人は一緒に楽しんだ。その後3歳児が森へやって来た。急にC介は、「前にふじあじさいが乗るんで。」と友達に呼び掛ける。Z美は「それいいやんC介君、それで当たりとかせん？」と提案する。E男「当たりは？・・・」するとC介「まっすぐ行ったら当たり、曲がったらはずれ



写真5 一本橋を遊びに加えるC介

で！」A子M子「いいなあC介君。」遊び方が決まり二人乗り台車に乗せる。しかし1回もまっすぐにいかず全てはずれとなる。Y子「当たり前にならんなあC介君。」「そうやなあ。」うなづくC介。「もう板半分にせん？そしてずーと先におりてから一本橋渡るってしよう。」次の案を提案するC介だがすぐに一本橋を取りに行く。A子M子も続き3歳児担任も一緒に手伝い、ジェットコースターの滑る坂道の滑り降りた先に一本橋を置きコースを作り3歳児を滑らせた。板1枚にすると、坂道が短くなりまっすぐ滑ることが出来当たりが出た。Y子「よし、いいね！」納得の様子である。3歳児を交えてジェットコースター遊びは続いていった。（別府大学附属幼稚園森で遊ぶ子どもの記録 筆者）

～著者による省察～ 事例4

・どうすればまっすぐに台車を滑らせることができるか友達の滑り方を観察し、気付きを出し合い相談しながら遊びを変えて友達と一緒に楽しんで遊ぶ姿がある。

・友達と協力しジェットコースター遊びを続けて楽しめた理由は。

①昨年の5歳児が行っていた魅力的なジェットコースター遊びを見ていた5名が、自分たちも同じようにスリルのある遊びをしたいと願う気持ちがあった。

②板の坂道の下まで台車でまっすぐに滑り降りたいというC介の強い思い。

③まっすぐに台車を滑らせることが出来たD子の存在。

④森の中で坂道に出来そうな傾斜地の場と空間。

⑤コンテナの下にコロを付けた台車と台のみの台車、板の坂道、などの物的環境に、試しながら滑らせ方の違いや疑問を感じ興味を持ちながら遊んだ。

⑥「坂道下までまっすぐに台車で滑る。」とい

うC介一人の思いが5人の共通の目的となり、目的に向かって真っすぐに滑れるD子の様子を観察したり滑る台車と板との関係に気づいたりする、という思考しながら遊ぶ楽しさに繋がって行ったこと。

⑦3歳児にも「まっすぐに滑らせ楽しませたい」という思いからジェットコースターを滑らせた後に一本橋渡りをするというコース遊びへ発展させて遊べた楽しさや考えを実現できた嬉しさ。

⑧友達と一緒に考えを出し合い対話しながら遊びを進めていく満足感や楽しさ。

⑨納得いくまでジェットコースター遊びができた時間と森の空間。の9つが考えられる。

・遊びの場である幼稚園裏の雑木林という自然環境との関わりが影響しているといえる。

子ども達は、この自然環境の中で“傾斜地に板2枚を持ち込み坂道にして遊ぶ”という自然環境の「傾斜地」部分の環境に対し意識・関心を示し、坂道という滑れる場に環境を作り替えて遊ぶ応答的遊びにして楽しんだ。そして、坂道と応答しながらコンテナ台車や板台車を使い、友達と対話しながら一緒に遊べる”ジェットコースター遊び“という魅力ある遊びを行い「まっすぐに滑らせて遊ぶ。」工夫や思考しながら遊びを広げ、他学年も交えて楽しく遊べるように遊びを広げ楽しむ主体的遊びになっていった様子が見られる。

5. 考察

(1) 主体的遊びとは

広辞苑で「主体的」とは、「主体」は組織や事柄の中心となるもの、動作を他に及ぼすものとあり、「主体的」は、ある行動や意見などをなすとき、自分の意思や判断によって働きかけるさまとある。国語辞典は「主体」は、自分の自由意思で行動するものとあり、どちらも解釈として、どんな状況でも自分の意思で判断した

り行動したりすることをいう。具体的には、事例1はJ男が教師からの働きかけがあったものの、浮かべ遊びを「船らしく」遊び方を競争するという自分の意思や判断で進めていく様。

事例2のU哉がモノに触れて遊ぶ中で水の不思議さに興味を持ち水の嵩や流れ方に気付きをもってじっくりと遊ぶ姿。事例3は、B子がS子と対話しながら自分の思いを出してS子とは違う見立て遊びを楽しんでいく様。そして事例4は、友達5人と協力しながら目的に向かって思考して遊びを進めていく姿と捉えられる。

(2) 主体的遊びと環境について

1) 興味の持てる環境との関わり

子どもにとって「おもしろそう・えっ?」という心が動いた時に遊びたいという気持ちが沸きその遊びに自分の関心や意欲が加わりもっと遊びたいという気持ちにつながる。主体的遊びとしての自分の意志ある遊びの源、始まりは“興味”からである。具体的に示せば、事例1はJ男が園庭に出来た長さ5メートルもある大きな「みずたまり」という自然環境に興味を持ったことであり、事例3ではB子が、H花が偶然遊び始めたカップの中に黄色のキャップを浮かべ「プリンです。」という遊びに「おもしろそう。」と興味を示したことであるといえる。とすれば興味の持てる環境を準備すればよいのかという疑問がわくが、その“興味”とは、人それぞれその時々にして変わっていくものである。どのような時に興味のある環境になるのか事例から考えると、事例1は、予想もしないほどの大きな「みずたまり」という自然にできた環境。事例2は水道からあふれ出しペットボトルの口から吹き上がる水しぶきや水槽の中に出てくる泡など今までU哉が気付くことのなかった「不思議な出方、流れ方の水」の自然現象である。このことから

①自分の予想しない、予想できない自然現象や事柄に出会ったとき子どもは関心を示し、興味

を持つといえる。さらに事例4では、C介がコンテナの下にコロを付けた台車を板の道に滑らせて遊ぶという遊びに興味を示し主体的遊びへとつながって遊んだ。これは、坂道を勢いよく台車に乗って滑り降りるという遊び・スリルある遊びに対し興味を持ったからである。コンテナの台車と坂道という環境に対し自ら関わりを持ったことで興味が出たといえる。憧れ「いいな」という思いは、事例3のB子がH花の「プリンです食べてくださいーい。」と持ってきた遊びに対しB子は予想していなかった「プリン」に憧れ、自分もしたいという思いが興味になりキャップを取り入れた見立て遊びへと変化して遊んだ。このことから②憧れを持った遊び・事柄に対し子どもは興味を示しその環境に自ら挑んでいくといえる。

2) 人的環境との関わり

対人関係についても興味につながると考える。事例1は、浮かべ遊びを一緒に行ったK男の存在。事例2は、遊んでいるU哉に対し時々声をかける教師の存在。事例3は、同じ遊びの場に来たH也、H花、S子、担任教師の存在。事例4は、どうすればまっすぐに滑らせられるか一緒に考えたY子、E男、まっすぐに滑って見せたD子の存在などと捉えられ、遊びにおいて人的環境との出会いが次の遊びへの関心や工夫、そして思考するという主体的遊びに繋がっていくといえる。このことから③自分一人の環境に友達や教師などの人的環境が関わり遊びを進めていく際に興味が芽生えると考えられる。

2) 応答的な関わりと主体的遊び

事例1はJ男が興味を持った「みずたまり」という自然環境に対し「みずたまり」を海に見立て、トレイで作った船を浮かべるといって応答的関わりをして遊んだ。「みずたまり」に気付いても何もせずに見ただけではこの主体的遊びには至らなかった。事例2は「水」と「ペットボトル」という自然環境と物的環境に対し、U

哉がそこに人がいるかのように勢いよく水を入れたり出したりいっぱいにして手を蓋にして運んだり水の上を撫でたりと、ペットボトルや水に対し応答的に関わり水と対話しながら遊んでいる様子がある。まさに応答的関わり対話的関わりが単なる「水の移し遊び」の水遊びを主体的遊びに変化させていったといえる。事例3は、カップやキャップ、小ボトル等様々に用意された中で色付きキャップという物的環境に対し、H花の人的環境の影響からB子が興味をもち、キャップや魚型タレピンを応答的環境にして「お魚焼いています。」などと対話的遊びをしながらジュース作りの遊びから見立て遊びへと主体的遊びにつながっていったといえる。

・興味を持てる環境に出会いその環境に対し応答的な関わりを持って遊ぶと、そのものが応答的環境となりモノとの対話が生まれ、更に環境を自分に取り入れて遊び、遊びに変化が生じ広がり深まっていく主体的遊びに変わっていくといえる。

3) 対話的な関わりと主体的遊び

事例1「浮いた！」では、J男が遊ぶ様子をK男が興味を抱き一緒にトレイの船を作り、浮かべ競争をするというJ男とK男の対話的関わりが遊びを面白くし、J男一人だけでなく更に友達を増やして遊ぶことに繋がった。事例2「最後の一発！」はタイトルのようにU哉が、「水」という自然環境を友達のようにして「かんばれ」や「最後の一発！」などいい、対話的環境にして遊び、手でかき混ぜたり入れたり流したりしながら予想しない水の流れて感じてじっくりと遊んでいく主体的遊びへと繋がって行った姿がある。事例3「ごはんできました」は、B子とH花、S子が、遊びに関わりながらそれぞれの遊びを楽しんでいき対話的環境になりB子は水の移し遊びからままごとの見立て遊びへと変化させ遊びを広げる主体的姿がある。事例4「どうしたらまっすぐにいくん？」のC介は、遊び

の場「坂道」に来た友達と対話的関わりを持ちながら自分の考え「なぜD子はまっすぐに滑れるのか」と友達と対話し、思考し意見も聞き入れながら更に楽しい遊びにしていって主体的姿が見られる。このことから対話的関わりが生まれてくると遊びへの関わりが深まり主体的遊びにつながるといえる。

6. まとめ

主体的遊びと環境との関わりについて、応答的関わり対話的関わりが環境に働きかける元になり主体的遊びにつながっていくのではないかという仮説の元に事例研究してきた本研究である。

主体的遊びと環境への関わりについて、子どもが「興味を示したときが環境への関わりの始まりである」ということが明らかになった。「興味」について①予想しない、予想できない自然事象や事柄に出会ったとき②憧れを持った遊びや関心に対し興味が沸く③自分一人の環境に友達や教師などの人的環境が関わり遊びを進めていく際に興味を持つと事例から検証できた。

応答的関わりについて、「興味を持ち心が動く」ことが人やモノへの応答的関わりとなり応答的環境になっていくといえる。

対話的関わりについて、人的環境だけでなく身近な環境、物的環境、自然環境に対し対話的関わりをもち主体的遊びにつなげていくといえる。

モノや人的環境に対し応答的・対話的関わりが生じたことがそれら様々な環境に働きかけ主体的遊びへと繋がっていくことも明らかになった。物事に心ひかれ面白いと感じる「興味」を持つことがまず環境への関わりの始まりであり応答的・対話的関わりの前に「興味」を持つかどうか主体的遊びや環境への関わりのカギとなっていた。仮説とは少し違う結果になった。しかし、興味が沸く興味を持つだけでは主体的

関わりにはならず、関わりを応答的・対話的に捉え環境に働きかけるかどうか関わりを深くし主体的遊びのきっかけとなるといえる。応答的・対話的関わりに焦点を当て事例研究したことは、環境と主体的遊びとの関わりにとって深い関係があることが分かり、間違いではなかったといえる。

「子どもにとって興味を持つことは大切」と耳にし主体的遊びへと保育内容や計画を考え実際に子どもと遊びをつくり保育を行ってきたが、事例研究を通し改めて「興味を持つ、興味を示す」ことがいかに大切であるか再認識できた。

興味の持てる環境といかに出合わせ興味を持った時に興味を示した時に、どのように援助し応答的関わりや対話的関わりになるよう環境構成を考えていくかが、子どもの遊びが主体的遊びへと発展していくか否かの決め手となると理解できた。そして主体的遊びを通し子どもの学ぶ力へとつながっていくといえよう。

今後は、このような結果を踏まえ主体的遊びからの子どもの学びについてこの観点からの考察を進めていきたい。

付記

本研究を遂行するにあたり、別府大学附属幼稚園の先生方並びに子ども達にご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領平成29年告示』
- (2) 厚生労働省 (2107) 『保育所保育指針平成29年告示』
- (3) 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省 (2017) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領平成29年告示』
- (4) 無藤隆 (2019) 『10の姿プラス5・実践解説書 よくわかる開設&写真で見る実践事例』 (6. 思考力の芽生え 本山方子 p p. 46-48) ひかりのくに